様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ１０２２６

研究課題名（和文）看護実践を肯定的な側面から評価する看護の質評価手法の確立とシステム開発

研究課題名（英文）Establishment and system development of a nursing quality assessment method to evaluate nursing practice from positive aspects

研究代表者
高田　望（Takada, Nozomu）

東北大学・医学系研究科・助教

研究者番号：６０７４６８４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、新たな看護の質評価方法を検討することが目的であった。看護の質評価がネガティブイベントの発生率に偏りがちであることを課題と捉え、ポジティブな側面から看護の質評価を試みた。その結果、医療の質の1側面である患者中心性に着目した。患者が患者中心の医療を享受できることは看護の重要な課題である。患者中心性を測定するため、患者経験という概念を取り入れた。患者経験は患者が医療を受ける中で望ましい経験をできたかどうかを患者自身が評価するものである。本研究課題では、患者経験を測定するためのWeb調査システムを構築し、臨床でのシステム導入及び評価を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、看護の質評価指標として患者経験に着目する重要性を明らかにした。また、患者経験を評価システムを臨床で導入することが出来る可能性を示唆した。一方で、患者経験を測定するための尺度は学術的および臨床的な課題を有することも明らかになり、さらなる研究の必要性が示された。患者経験は今後の看護の質向上に寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine a new method of assessing nursing quality. Considering the fact that nursing quality assessment tends to be biased toward the incidence of negative events as an issue, we attempted to assess nursing quality from positive aspects. As a result, we focused on patient-centeredness, which is one aspect of healthcare quality. The ability of patients to enjoy patient-centered medical care is an important issue for nursing. In order to measure patient-centeredness, the concept of patient experience was introduced. Patient experience is the patient's own assessment of whether or not they have had a desirable experience while receiving medical care. In this research project, we developed a web-based survey system to measure patient experience, and implemented and evaluated the system in a clinical setting.

研究分野：看護管理学

キーワード：看護の質評価　患者経験　Patient eXperience　システム開発

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

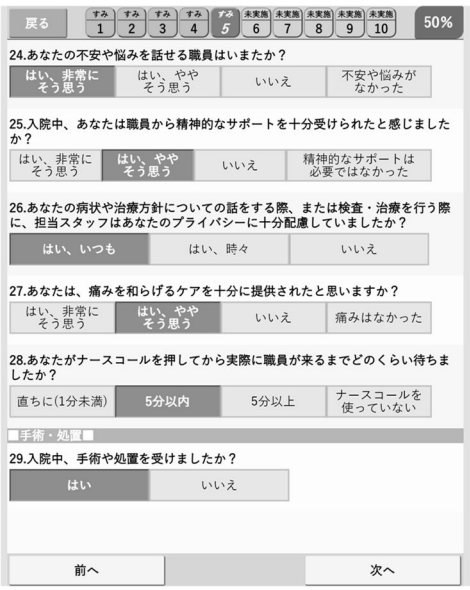
質の高い看護を提供するためには、看護の質が客観的に評価できることが望まれる。応募者らは、現行の看護の質評価の課題として、評価指標がとりわけ有害事象の発生などの否定的側面にばかり注目されがちなこと、看護管理者が記録と記憶を頼りに手作業でデータ集計を行うため、患者の臨床経過や提供した看護ケアなどのデータ使用が困難なことがあると考えた。これらを踏まえ、本研究課題では次の３点を目標とした。(1) 看護実践を肯定的側面から評価するための指標はどのようなものか。(2) 看護の質評価に関するデータを機能的に集計する技術はどのようなものか。(3) 肯定的側面から捉える看護の質評価は看護の質を適正に測定・評価しうるのか。本研究の最終的な目標は、看護の質を適正に可視化するデータセットの作成とシステム開発を通して、将来のビックデータ蓄積やナショナルデータベース構築の基礎を築くことであった。

## ２．研究の目的

看護の質評価指標の検討を行い医療の質評価の１側面である患者中心性に着目することとした。患者が患者中心の医療を享受できたかどうかを測定するため、患者報告型アウトカム評価の一つである患者経験（Patient eXperience: PX）を看護の質評価指標として選定した。以上のことから、本研究の目的は入院患者に対する患者経験価値調査を試験導入し、PX 調査の実行可能性および運用上の課題を明らかにすることであった。

## ３．研究の方法

調査に先立って、PX 調査システムを開発した。はじめに使用する PX 尺度の選定を行い、一般社団法人ペイシェント・エクスペリエンス研究会（PX 研究会）がわが国の状況に適合させて作成した「日本版 PX 調査票」を使用することに決定した。これは英国 NHS の PX 調査票を翻訳し、日本の状況に合わせて設問の削除または文言の適切化を行った調査票である。続いて、Web 調査システムを作成した。Web 版 PX 調査システムには、PX 調査表に加えて患者の基本属性、および患者満足度を含めた。病院が保有するタブレット端末を用いて患者に回答を依頼するシステムである。回答は研究施設の Web サーバに蓄積され、研究者は必要に応じでデータをダウンロードして解析を行うことができる。Web アンケートは、医療従事者回答ブロック（基本属性、有害事象、ADL、退院先の情報）と患者回答ブロック（同意欄、PX 調査、患者満足度調査、自由記述）に分割して構成し、医療従事者が必要事項を回答後に、タブレットを患者に渡して回答を依頼する調査フローとした。



図：本研究で開発した Web 版 PX 調査システムのタブレット画面

調査は A 病院看護部の協力のもと、2020 年 3 月から 3 病棟をフィールドとして開始した。しかし、新型コロナウイルス感染症流行に伴い 2 病棟での調査が継続不可能となり、最終的に１病棟のみをフィールドとして調査を継続した。

調査フローは以下の通りであった。

① 入院患者の退院が決定したら、看護師長が患者にアンケート調査があることを説明する。
② 協力の許可が得られた患者のもとに、看護助手がタブレット端末を持参して患者に使用方法を説明する。
③ 患者がタブレット操作をできない場合、看護助手がサポートを行う。

PX の実行可能性を確認するため、対象者の回答状況および調査実務を実施している看護助手への聞き取り調査を実施し、実施可能性および運用上の課題を整理した。

本調査は、調査項目に患者の個人情報鵜を含めない匿名調査とした。患者に対して、協力は任意であること、協力しなくても不利益がないことを十分に説明し、タブレット端末内に作成した Web 同意書を用いて同意の有無を確認した。研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

## ４．研究成果

2020 年 4 月 1 日から 2020 年 9 月 30 日の 5 カ月間の A 病棟の結果を集計した。この期間に A 病棟を退院した患者は 463 名で、そのうち 130 名（28.1%）に調査協力を依頼した。8 名が不同

意のため、122 名のデータを分析した。回答者の平均年齢は 64.5±13.9 歳（範囲 19－86 歳）、男性 73 名（59.3%）、女性 49 名（40.2%）だった。

PX 調査の実行可能性および運用上の課題を明らかにするため、患者に調査依頼を行っている看護助手に聞き取り調査を実施した。その結果、今回の PX 調査に関する複数の課題が明確になった。まず、高齢者にはタブレット操作が困難であった。75 歳以上では単独で入力できるケースは少なく、多くのケースで入力支援が必要だった。60～74 歳では約半数程度で入力支援が必要であり、59 歳以下では概ね自分で入力できるケースが多かった。その帰結として、現行の Web 調査システムでは調査を行う職員の負担が課題であると考えられた。入力のサポートが必要な場合、サポートに 30 分以上を要するケースも生じていた。さらに自分で入力が可能なケースであっても、タブレットでは受け渡しや引き取りの手間があった。そのほかにも、退院日が決定したタイミングで調査を実施するフローのため、答えにくい項目があることが明らかになった。例えば、退院後の生活指導の有無を問う設問に対する回答は、退院するまで生活指導が無かったことが分からないといった問題がある。

これらの点から、今後の課題が示唆された。第一に、より使いやすい Web 調査システムの開発、職員の業務負担が少ない調査フローの確立である。そのためには、質問項目数や内容に関して再検討を行う必要がある。これらの課題を克服することで、患者経験という新たな側面から看護の質を測定可能になると期待された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>高田望 |
| ２．発表標題<br>Web版PXサーベイのシステム開発と導入 |
| ３．学会等名<br>日本医療マネジメント学会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>野田朋花、高田望、杉山祥子、菅原寛子、佐々木百合花、朝倉京子 |
| ２．発表標題<br>学生看護助手を活用したWeb版PXサーベイの運用 |
| ３．学会等名<br>日本看護管理学会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 朝倉　京子<br>(Asakura Kyoko)<br>(00360016) | 東北大学・医学系研究科・教授<br>(11301) | |
| 研究分担者 | 吉沢　豊予子<br>(Yoshizawa Toyoko)<br>(80281252) | 東北大学・医学系研究科・教授<br>(11301) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 宮下　光令<br><br>(Miyashita Mitsunori)<br><br>(90301142) | 東北大学・医学系研究科・教授<br><br>(11301) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|